



////////////////////////////////////

# 日本植物分類学会 ニュースレター

////////////////////////////////////

No. 58

Aug. 2015

## 今号のトピックス

2015 年度講演会は 12 月 19 日（土）です。  
 学会賞および奨励賞の候補者を募集しています。  
 野外研修会（10 月 9～11 日）も引き続き募集しています。

## 目 次

### お知らせ

- 2015 年度日本植物分類学会講演会のお知らせ .....2
- 第 15 回（2016 年度）日本植物分類学会賞（学会賞および奨励賞）の  
 受賞候補者の募集 .....2
- 2015 年度日本植物分類学会野外研修会のお知らせ（再） .....3
- 新着交換図書紹介（2015 年 4 月 11 日～7 月 10 日） .....3

### 寄稿

- 学名のラテン語（18） .....4

### 書評

- 北海道維管束植物目録 .....6

### 植物研究会・同好会紹介

- 「近畿植物同好会」 .....6
- 会員消息 .....8

## お知らせ

### 2015 年度日本植物分類学会講演会のお知らせ

講演会担当委員 岡崎 純子

平成 27 年度の日本植物分類学会講演会は、大阪学院大学の林一彦先生にお世話いただき、次のとおり開催いたします。演者等詳細につきましてはメーリングリストおよび次回のニュースレターでご案内いたします。

【日時】2015 年 12 月 19 日（土）午前 10 時～午後 4 時 40 分

【講演会場】大阪学院大学・2 号館地下 1 階 2 号教室 (02-B1-02 教室)

〒564-8544 大阪府吹田市岸部南 2 丁目 36 番 1 号（電話：06-6381-8434）

【会場までの行き方】JR 東海道本線岸辺駅、阪急京都線正雀駅から大阪学院大学までともに徒歩 5 分、詳しくは大学の HP (<http://www.osaka-gu.ac.jp/guide/campus/access.html>) から「交通アクセス」をご覧ください。

### 第 15 回（2016 年度）日本植物分類学会賞（学会賞および奨励賞）の受賞候補者の募集

日本植物分類学会会長 角野 康郎

学会賞選考委員長 秋山 弘之

日本植物分類学会賞（学会賞および奨励賞）の受賞候補者を募集します。学会賞・奨励賞ともに、会員の皆様からの積極的な自薦による応募を期待します。他薦についても、ふるってご推薦いただければ幸いです。これまでの受賞者名等が学会ホームページでご覧いただけます。候補者は学会賞選考規定第 2 条に基づき、以下に該当する方です。

「日本植物分類学会賞」：植物分類学および日本植物分類学会の発展に特に顕著な貢献が認められた方に授与いたします。受賞者の資格は 10 年以上継続して本会会員である方です。

「日本植物分類学会奨励賞」：平成 28 年 4 月 1 日において満 38 歳以下で、優れた研究業績をあげた将来有望な若手研究者（学生を含む）に授与いたします。受賞者の資格は 3 年以上連続して本会会員であり、主要な研究業績の一部を本会の大会または雑誌に発表している方です。

#### 募集要領：

自薦の場合は、(1) どちらの賞への応募か、(2) ご自分の研究全体を示すタイトル、(3) 略歴（生年月日、学歴、職歴など）、(4) 調査・業績の概要、(5) 業績リスト（論文、著書など）と本学会の大会での発表記録を MSWord や一太郎等の電子ファイル、あるいは A4 用紙に記入してお送りください。書式は自由です。他薦の場合は、推薦する候補者の氏名と推薦理由、どちらの賞に推薦するかをお知らせください。

自薦、他薦を問わず、さらに必要な資料があれば学会賞選考委員会から候補者の方に提出を依頼します。応募は e-mail でのファイル添付または郵便でお願いします。

書類送付先：〒669-1546 三田市弥生が丘 6 丁目 兵庫県立人と自然の博物館 秋山弘之 e-mail: akiyama アットマーク hitohaku.jp （カタカナを @ に変えてください）

応募締め切り日：平成 27 年 9 月 28 日（月）

両賞の受賞者は、平成 28 年 3 月の日本植物分類学会大会（富山）において表彰されます。また、同大会において受賞講演を行っていただき、和文誌『分類』に受賞記念論文を发表していただくことを原則としております。

## 2015 年度日本植物分類学会野外研修会のお知らせ（再） 申込は 9 月 10 日まで

世話役 林 蘇娟（島根大学）  
野外研修会担当委員 西野 貴子

ニュースレター 57 号にてご案内しました「隠岐諸島の植物」（2015 年 10 月 9～11 日）の申込みを受付中です。続々のご連絡をいただいておりますが、まだ幾分か余裕があります。

その地史的背景から多様な植物種を有することとなった隠岐諸島は、興味深い植生はもちろんのこと、ダイナミックな自然景観、海の恵み、そして神楽や田楽といった文化も残る、彩り豊かな島々です。9 月 10 日まで申し込み期限を伸ばしました。八百万の神々とともに、ぜひ 10 月は島根に、隠岐においでください。野外研修会の詳細については、ニュースレター 57 号をご覧ください（ニュースレターは学会のウェブページからも見ることができます）。

### 申し込み先：

島根大学生物資源科学部 林 蘇娟（Lin Su-Juan）  
電子メールアドレス：sjlin@life.shimane-u.ac.jp  
電話とファックス：0852-32-6444  
（できるだけメールやファックスでご連絡いただきますようお願い致します）

野外研修会は、年 1 回、日本各地で開催しています。ベテランの皆さまだけでなく、初めての方、特に学生会員の方々も大歓迎です。じっくりと植物を観察し、採集することができますし、植物の話題もたっぷりです。植物を覚えたい初学者の方も、自分の好きな分類群を語りたい方も、皆さまどうぞお気軽にご参加ください。

## 新着交換図書紹介（2015 年 4 月 11 日～7 月 10 日）

図書幹事 高野 温子

Blyttia 72(4), 73(1)  
Korean Journal of Plant Taxonomy 45(1)  
Reinwardtia 13(5)  
Revue Valdôtaine d'Histoire Naturelle 67  
Englera 32 (Orchid seed diversity)  
Aliso 32(1), 32(2)  
Systematics and Biodiversity 12(2)  
Bishop Museum Occasional Papers 115  
Willdenowia 44(2), 45(1)  
Candollea 69(1)  
Bulletin of the Hunt Institute for Botanical Documentation 26(2)

Plant Ecology and Diversity 8(1)  
Darwiniana 2(1-2)  
Annals of the Missouri Botanical Garden 100(3)  
Journal of Tropical and Subtropical Botany 23(2)  
Bulletin mensuel de la Société Linnéenne de Lyon 84(5-6)  
Hoppea 75  
Handbuch Genbank Wel (Hoppea special volume)  
Smithsonian Contribution to Botany 96  
Plant Diversity and Resources 37(2)  
The Bulletin of the National Tropical Botanical Garden 31(4)  
Journal of Plant Research 127(3), 127(6), 128(3), 128(4)  
Bulletin of the National Museum of Nature and Science, Series B (Botany) 41(1)  
Bulletin of the Osaka Museum of Natural History 68  
大阪市立自然史博物館所蔵 甲虫類目録 (3)  
自然史研究 15(3)  
Hikobia 16(3)  
奈良のシダ 34  
岐阜県植物研究会誌 28, 29  
視覚の認知生態学  
蘚苔類研究 10(10), 11(3)  
植物研究雑誌 90(1), 90(3)  
長岡市立科学博物館研究報告 50  
徳島県立博物館研究報告 25  
日本植物分類学会第 13 回大会研究発表要旨集  
日本植物分類学会第 13 回大会公開シンポジウム要旨集  
日本植物分類学会第 14 回大会研究発表要旨集

学会員の方は、兵庫県立人と自然の博物館（兵庫県三田市弥生が丘 6 丁目 アクセス方法は <http://www.hitohaku.jp> をご覧ください）にて閲覧可能です。閲覧希望の方は、図書幹事にお問い合わせください。文献複写依頼はお受けできませんので、予めご了承ください。

## 寄稿

---

### 学名のラテン語 (18)

永益 英敏（京都大学総合博物館）

#### 種と種内分類群の学名の形容語–属格の名詞 (3)：人名を記念した形容語 2

属格の名詞をつかった、人名を記念した形容語のつくり方については、「国際藻類・菌類・植物命名規約」(McNeill et al. 2012) の勧告 60C.1 に規定があり、これに反する語尾の使用は訂正されるべき誤りとして扱われる（第 60.12 条）ことは前回述べた。（永益 2015）。

しかし一方で、勧告 60C.2 では「すでにギリシャ語やラテン語にある人名、または定着したラテン語形をもつ人名を用いて新しい名詞の形容語をつくるためには、それらの名前の適切なラテン語の属格を用いるべきである」としている。ラテン語からは遠い日本語を使用する日本人にはわかりにくい勧告だが、ギリシャ語やラテン語のちゃんとした形がある名前の時には、わざわざラテン語風の別の名前を新しくつくりだす、もともとの名前の属格形を使いなさい、ということである。

## ◇すでにギリシャ語やラテン語にある人名の例 (勧告 60C.2)

Alexander および Alexandre は、勧告 60C.1 に従ってラテン名をつくと Alexander-us および Alexandre-us となり、その属格はそれぞれ Alexander-i および Alexandre-i ということになる。しかし、これらの名前はギリシャ語に由来し、相当するラテン名は Alexander である。その属格は Alexandri であるので、形容語として *alexandri* を用いる。同様に Beatrix または Béatrice では、ラテン語の Beatrix (第三変化名詞) の属格形を用いて *beatricis* とする。(ハイフンは語尾を示すために用いた。以下同様)

## ◇定着したラテン語形をもつ人名の例 (勧告 60C.2)

C. von Linné (Linnaeus), G. Bauhin (Bauhinus), G. E. Rumph (Rumphius), R. Brown (Bruno), C. de l'Escluse (Clusius) などの植物学者は、ラテン語で著作をものしてラテン語化した自身の名前を著作の扉に記していたり、すでに定着したラテン語の形があったりする (かっこ内にそのラテン語形を示した)。それらのラテン名に基づいた、属格形を用いた形容語はそれぞれ *linnaei*, *bauhini*, *rumphii*, *brunonis*, *clusii* である。

ところで、個人名などの固有名詞に基づく形容語の場合も、著者による綴りの変更が意図的なラテン語化である場合は、原綴主義 (第 60.1 条) により、基本的にはその変更が保持されなければならない。第 60.7 条では訂正できる場合を次のように明確に定めている。

## (a) 変更が形容語の語尾に限られ、第 60.12 条が適用される場合

人名を記念した形容語で、勧告 60C.1 に反する語尾を使用した場合で、属格名詞の語尾 *-i*, *-ii*, *-orum*, *-iorum*, *-a*, *-ia*, *-arum*, *-iarum* や、形容詞では *-anus* や *-ianus* など。

## (b) 人名の、(1) 末尾の母音あるいは末尾の子音が省略されている場合、または (2) 末尾の母音が別の母音に転換されている場合

フランス人植物学者 J. de Loureiro を記念してつくられた属格の形容語には、勧告 60C.1 に従う *loureiroi* の他に (*Convolvulus*) *loureiri*, (*Chenopodium*) *loureirei* が発表されているが、暗黙の内にラテン語化された人名は、前者では *loureir-us* と末尾の母音 *-o* が省略されており (a) のケース)、後者では *loureire-us* と末尾の *-o* 母音が別の母音 *-e* に変換されている (b) のケース) ため、どちらの形容語ももとに戻した *loureiro-i* を用いなければならない。

一方、マニホットゴムノキ *Manihot glaziovii* Müll.Arg. の種形容語はフランス人植物学者 A.F.M. Glaziou を記念したものだが、Glaziou の末尾の母音 *u* が「子音」*v* に「意図的に」変更され、Glaziou は暗黙のうちに *Glaziovius* とラテン語化されている。これは (1), (2) のいずれにも当たらないので、この綴りは保持されなければならない、*glazioui* と修正することはできない。

人名を記念した学名の場合には、このような標準化規定があるため、そのまま使用できるかどうかは第 60.7 条、第 60.12 条に従って確認する必要がある。

人名をラテン語化するもう一つの方法に、翻訳がある。「国際藻類・菌類・植物命名規約」では、上に述べたような「修正 modification」によるラテン語化と、「翻訳 translation」によるものを明確に区別しており、翻訳でつくられた形容語は第 60.7 条および第 60.12 条による標準化には従う必要はない (第 60 条付記 2)。翻訳の例は、第 60 条付記 2 にもあげられているが、ドイツ語の Bergzabern (berg 山 + zabern 宿屋) を *Tabernaemontanus* (taberna 宿屋 + montanus 山) とラテン語化するようなことである。高名な中世ドイツの鉱物学者 G. Agricola も、本名の Pauer (農夫を意味する。現在のドイツ語では Bauer) を同じ意味のラテン語 Agricola としたものである。実例 19 には 1995 年に発表されたウオレミマツ *Wollemia nobilis* の例がある。形容語 *nobilis* は発見者 D. Noble の名字をラテン語に翻訳して形容詞 (属格の名詞も同形) として用いている。

筆者が印象に残っている翻訳の例として、*Symplocos columbuli* Noot. (1980) がある。この形容語 *columbuli* は、タイプ標本の採集者のひとりでもある B.E.E. de Wilde-Duyfjes を記念してつくられた。オランダ語の *duyfje* (小鳩を意味する。現在の綴りは *duifje*) を同じ意味のラテン語 *columbulus* に翻訳して、その属格 *columbuli* を用いたのである。de Wilde-Duyfjes は女の人 (Duyfjes は結婚前の姓) なので女性形の *columbulae* を用いればよいのに、と思った記憶がある。しかし、翻訳でつくられた形容語は第 60.7 条および第 60.12 条による標準化には従う必要はないので、この形容語は語尾が修正されることはない。

McNeill, J. et al. (eds.) 2012. International Code of Nomenclature for algae, fungi, and plants (Melbourne Code). Koeltz Scientific Books, Königstein.

永益英敏. 2015. 学名のラテン語 (17) 種と種内分類群の形容語-属格の名詞 (2) 人名を記念した形容語 1. 日本植物分類学会ニュースレター 56: 17-18.

## 書評

### 北海道維管束植物目録

高橋 英樹 (監修) 松井 洋 (編集)

頒価: 4000 円 (税込), A4 版, 288 ページ. ISBN なし.

重たい植物図鑑を何冊も持ち歩くことはやはり面倒である。調べても載っていないなあとと思ったらやっぱり外来植物だった。自分の住んでいる地域に生育する植物だけを扱った、しかも外来種も含めてすべて網羅した図鑑があったらどんなに楽だろう。特に初学者にとっては、図鑑で調べることのハードルがずいぶん下がると思う。

本書は北海道で見られる自生種のみならず、すべての外来種や国内移入種を含む、北海道の全自生植物 2,404 分類群を網羅した目録である。ただし図鑑ではないので、これで種の同定ができるというものではない。編者もまえがきで書いているように、これは北海道産植物の分類学的研究を進め、「北海道植物誌」を完成させるための出発点である。

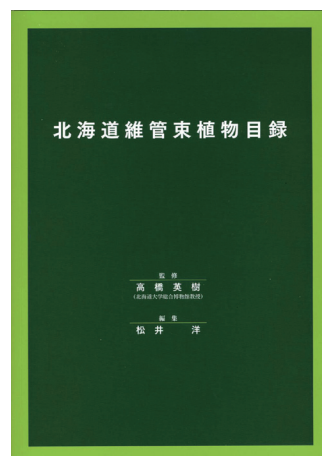
本書の特徴として、最近の図鑑類で見られるように、APGIII 分類体系を採用している。APGIII 体系は今後ますます浸透していくと思われるが、旧来の体系との対応を把握するのがやや面倒である。その点、本書は索引が充実しており、対象の種が APGIII 分類体系でどの科に含まれるのかを調べる場合にも重宝するだろう。また、単に種をリストしただけでなく、帰化種かどうかの注釈はもちろん、北海道や環境省のレッドリストでどのように扱われているかも記されており、北海道の植物を研究する上で必携の書である。「北海道植物誌」が完成するのが待ち遠しい。

問合せは

〒064-0807 札幌市中央区南 7 条西 9 丁目 1030-4-401

E-mail: matsui-h18@jcom.home.ne.jp 松井 洋氏まで

(東 浩司, 京都大学大学院理学系研究科)



## 植物研究会・同好会紹介

### 「近畿植物同好会」

山住 一郎 (近畿植物同好会会長)

近畿植物同好会は、初代会長 堀 勝氏により、堺植物同好会という名称で昭和 4 年 (1929 年) 4 月に発足しました。京都大学理学部植物学教室から田代善太郎先生を招聘し、第 1 回の植物採集会が同年 4 月 28 日に堺市浅香山の松林で行われ、発会式が行われました。

その後、堺市以外からの入会者が増え、名称は「河泉植物同好会」と改められました。さらに、大阪植物同好会・兵庫植物同好会 (牧野富太郎先生が、年に数回神戸に来られるのを機に組織された会)

から入会される方が多くなり、また、採集会が北摂・兵庫・京都・奈良・和歌山などで開催され、京都・奈良・和歌山からの入会者も増えたため、7年目から「近畿植物同好会」と改められました。終戦前後の6年間を休会にしたほかは、たゆみない活動を続け、創立86年目の現在に至っています。戦後は、北村四郎先生、田川基二先生、広江美之助先生、村田源先生にご指導をいただいてきました。創立80周年(2009年)の折には、村田源先生を講師に、記念講演会並びに金剛山での記念観察会を開催しました。

会員数は約190名で、近畿圏以

外からの入会者もあります。主な行事・事業は、毎月の例会(観察会・室内例会)と年1回の総会(研究発表・講演及び総会議事)、会誌・会報の発行です。観察会は主に近畿各府県の観察地で行われ、毎年1回は宿泊観察会を実施しています。毎回30～40名の参加者があり、創立以来、640回の例会を開催しました。また、会誌は38号、会報は121号を発行しました。昭和47年から10年をかけて実施された社寺林調査(府内50社寺)は、同好会としては本会が初めてであると思います。

会員は、身近な植物の名前を知りたいという方、草花に興味があり植物のことを詳しく勉強したいという方、園芸植物、薬用植物、茶花やボタニカルアートに関心を持っている方々など多彩です。シダやスゲ、帰化植物、地域フロラなどについて調査・研究をしている方々もいます。また、日本植物分類学会の会員(植物分類地理学会からの会員を含む)もおられ、野外研修会・講演会などにも多数参加されています。ここで得られた植物に関する新たな情報も私たちの知識の源となっています。

大阪府内の植物分布や植物相に関する研究成果は、大阪博物学会編『大阪府植物便覧』(昭和4年)、田代善太郎・堀勝著『大阪府植物誌』(昭和13年)、堀勝著『大阪府植物誌』(新版)(昭和37年)などにまとめられています。『大阪府植物便覧』は、大阪博物学会の委嘱により、堀氏が府内全域の植物をまとめられた最初の出版物で、その緒言には、「本書の編纂に当たり本会は会員堀勝氏を主任に囑託しました。特に牧野富太郎先生、田代善太郎先生、宇井縫蔵先生方のご懇篤なる御指導に対しては厚く感謝の意を表します」と書かれています。

『大阪府植物誌』(新版)から28年を経て、平成2年(1990年)に、第2代会長桑島正二氏が『大阪府植物目録』(近畿植物同好会発行)を出版されました。大阪市立自然史博物館所蔵の数万点の標本に当たられ、近畿植物同好会の60周年記念出版として刊行されたものです。

『大阪府植物目録』の刊行以降、新出の植物が記録される一方で、過去に記録された植物で、開発や環境の変化により消滅あるいは減少した種、現状が不明とされる種も多数に上ります。特に大阪府北部、北摂地域のシカの食害は深刻で、府内の植物の現状をまとめておくことの必要性を私たちは感じていました。このことから、創立80周年を機に、最も植物相が豊かな金剛山域の植物調査をスタートさせました。金剛山は、歴代の会長、会員の方々が精力的に踏査し、植物相を明らかにしてきた地域です。この調査が、将来における府内全域の植物調査の第一歩となることを願っています。



植物分類地理学会採集会(昭和30年9月25日、高野山大門にて):会誌第7号(1979年)より引用

初代堀勝会長(前列左から3人目)、北村四郎先生(同、4人目)、田川基二先生(同、6人目)、村田源先生(同、7人目)、第2代桑島正二会長(後列左から8人目)



第640回例会(宿泊観察会)奈良県天川村洞川にて(平成27年7月11日)

